

日本大学理工学部

# 一般教育教室彙報

第 103 号

---

## 目 次

### — 論 文 —

スポーツ推進に向けた「する」「みる」「ささえる」の好循環を生むための基礎的調査  
.....難波 秀行, 重城 哲, 高橋 亮輔, 服部 英恵, 安住 文子, 沖 和磨 ..... 1

### — 研究ノート —

川端画学校の中国人留学生について ..... 周 一川 ..... 11

— 研究動向一覧表 — ..... 25

---

2017年10月

# スポーツ推進に向けた「する」「みる」「ささえる」 の好循環を生むための基礎的調査

難波 秀行, 重城 哲, 高橋 亮輔,  
服部 英恵, 安住 文子, 沖 和磨

(平成29年7月20日受理)

## Basic Survey to Create an Ideal Circulation of Playing, Viewing and Supporting for Sports Promotion

By Hideyuki NAMBA, Akira JUJO, Ryosuke TAKAHASHI,  
Hanae HATTORI, Ayako AZUMI, Kazuma OKI

(Accepted July 20, 2017)

### 1. はじめに

2020年東京オリンピック・パラリンピック開催は、わが国におけるスポーツの価値を見直す良い機会になることが期待されている。文部科学省は、2010年8月にわが国のスポーツ政策の基本的方向性を示す「スポーツ立国戦略」<sup>1)</sup>を策定し、2011年8月に「スポーツ基本法」<sup>2)</sup>の施行により、スポーツに関する基本理念を定めている。スポーツ基本法では、スポーツは世界共通の人類の文化であるとし、スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利であることを謳っている。そして新たなスポーツ文化を確立するための基本的な考え方として、する人、みる人、ささえる(育てる)人を重視することが示されている。

スポーツをする人、みる人、ささえる人の好循環を生み出す必要がある例として、

健康増進のための生涯スポーツの普及、すなわちする人の増加を目指しても、それをささえる人、支援する仕組み、設備・環境などの整備は欠かすことができない。あるいは競技力向上を目指した場面において、みる人を増やすことにより競技団体に予算が還元される仕組みを構築することが競技スポーツの発展には欠かせない。このような背景から、文部科学省は2017年4月より「大学スポーツの振興に関する検討会議」を開催し、全米大学体育協会(NCAA: National Collegiate Athletic Association)をモデルとした日本版NCAAの創設に向けた検討を進めている<sup>3)</sup>。

一方、スポーツの良い側面のみならずスポーツの価値を見直すべき事案として、2013年1月の大阪市立高校の運動部顧問による体罰事件の発覚、柔道女子日本代表選手に対する暴力問題の発覚などを契機に、文部科学省は「運動部活動での指導の

ガイドライン」を含めた調査研究報告書「運動部活動の在り方に関する調査研究報告書」(2013年5月)<sup>4)</sup>を公表している。本調査では、大学生が過去にどの程度、スポーツ場面において暴言・罵声、体罰等の経験をしたかについても言及した。先に述べたように高等教育機関における体育・スポーツ教育、競技スポーツの発展は、スポーツ界の連携・協働による好循環を生み出す原動力として期待される。

本調査では大学生を対象にスポーツを経験したことにより得られた能力や身につけたことなどプラスの側面を明らかにするとともに、スポーツ立国戦略に示された、する・みる・ささえる(育てる)に対して、在学生がどの程度、日常的にスポーツに親しみ、スポーツを楽しみ、スポーツを支え、スポーツを育てる活動に参画しているのかを明らかにすることを目的とした。そして、大学スポーツ推進に関する意識や東京オリンピック・パラリンピック観戦やボランティアに対する意識についても調査した。

## 2. 方法

### (1) 調査対象者

日本大学理工学部における一般教育保健体育科目の履修者を対象にした。回答した対象者は男性 843 人、女性 179 人、合計 1,022 人で回答率は 46.3%であった。男性のうち 840 人が 1 年生で 3 人が 2 年生であった。女性は 179 人全員が 1 年生であった。

### (2) 調査方法と期間

2016 年 9 月に行ったスポーツⅡの第一回目の種目選択ガイダンス授業においてア

ンケートの主旨を説明し、Web アンケートの URL と QR コードを示した A4 資料 1 枚を配布した。回答時期は、ガイダンス終了後 7 日間までを目安に回答するよう指示した。今回の調査は、全国大学体育連合の取り組みの一環で行っており、回答結果は統計資料とし個人を特定しないこと、成績には関与しないことを説明し同意を得たもののデータを扱った。スマートフォン、タブレット端末、PC 等により回答をさせた。

### (3) 調査内容

調査内容は全 18 項目で構成され、運動習慣やスポーツ経験などの「するスポーツ」に関する 5 項目、スポーツ観戦やメディアの利用状況などの「みるスポーツ」に関する 6 項目、スポーツ・ボランティアの経験など「ささえるスポーツ」に関する 5 項目、そして大学スポーツに関する 2 項目であった。それぞれの調査内容については、後述の調査結果の節で示す。図 1 にする・みる・ささえるスポーツの概念図を示した。するスポーツでは、運動技能の習得、健康増進、コミュニケーション力の向上、社会人基礎力の習得などが目的となる。みるスポーツでは、卓越したパフォーマンスをみることによる感動を体験したり、選手と同様の空間を共有できたりする。ささえるスポーツでは、スポーツの指導や大会ボランティアの活動を通じて、社会貢献や地域貢献を可能とする。する・みる・ささえるが好循環することにより、スポーツ環境が整うことにより、社会全体として生涯スポーツの普及や競技力向上が見込まれる。

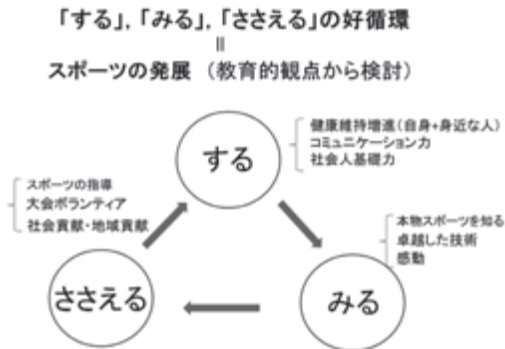


図1 する・みる・ささえるスポーツの概念図

(4) 統計処理

本調査における記述統計の数値は全回答者に対する割合 (%) と人数を用いた。運動・スポーツの取り組み状況の男女比較はカイ二乗検定により有意水準 5%未満を統計的有意差ありとした。

3. 結果

(1) する・みる・ささえるの相互関係

図2 にする・みる・ささえるのそれぞれの条件に合致する割合を示した。本研究における「する」の条件は、後述する図3 に示した最近1か月間の運動・スポーツへの取り組み状況として、週2回以上運動をしている者(6ヶ月以内、6ヶ月以上の両方含む)とした。「みる」の条件として、表1 に示した過去1年にスポーツを直接観戦・鑑賞した経験がある者とした。「ささえる」の条件として、図8 に示した過去1年間に何らかのスポーツ・ボランティアを経験している者とした。本研究のスポーツをする・みる・ささえるの条件には競技性の高いものから生涯スポーツのような活動を含むものとした。

本研究で定義したする・みる・ささえるの3条件に合致するものは全体の7.0%(72人)であった。最も割合が高かったのは、みるのみの37.3%(381人)であった。みる・ささえるの2条件に合致するのは19.9%(203人)、する・みる4.9%(50人)であった。するのみ2.2%(22人)、ささえるのみ5.2%(53人)であった。しない・みない・ささえないのスポーツ無関心層は23.1%(236人)であった。

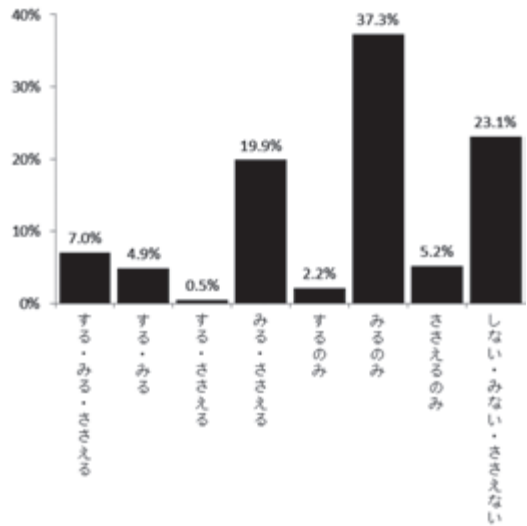


図2 する・みる・ささえるスポーツの相互関係

(2) するスポーツ

最近1ヶ月間の運動・スポーツへの取り組みについて図3に示した。週2回以上、6ヶ月以上継続している者は、男性17.3%(146人)、女性8.4%(15人)、週2回以上、6ヶ月未満は男性7.9%(67人)、女性6.1%(11人)であった。一方、運動していなく、するつもりもないと回答した無関心層は、男性18.5%(156人)、女性31.3%(56人)であった。男女間で運動ス

スポーツの取り組み状況に差があり, 男性の方が女性よりも運動・スポーツへの取り組み状況は良好な傾向があった ( $X^2=33.84$  ( $p<0.05$ ))。

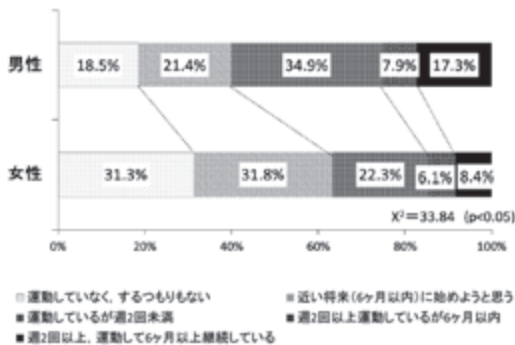


図3 最近1ヶ月間の運動・スポーツへの取り組み状況

運動やスポーツを継続的にしていた学校時代について図4に示した。男性では中学生が最も多く88.1% (743人)であり, 小学生が78.4% (661人), 次に高校生66.9% (564人), 大学生23.4% (197人)と中学生以降は年齢が上がるごとに割合が低下していた。女性では, 小学生, 中学生がいずれも57.5% (103人)で, 高校生45.3% (81人), 大学生10.6% (19人)で年齢が上がるごとに割合が低下していた。

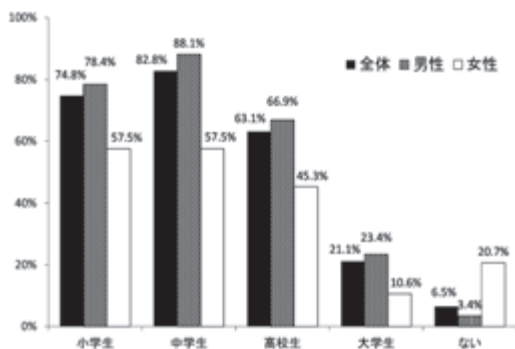


図4 運動やスポーツを継続的にしていた学校時代

運動部やスポーツクラブ, スクールなどで身につけたり, 経験したりしたことについて図5に示した。最も割合が高かったのはチームワーク力72.8% (697人), 次にコミュニケーション力63.9% (612人), 運動での怪我や病気52.1% (499人), 自己管理能力51.8% (496人), 組織を運営する力26.5% (254人)であった。暴言・罵声11.5% (110人), いじめ4.9% (47人), 体罰・暴力4.7% (45人), ハラスメント2.1% (20人)であった。

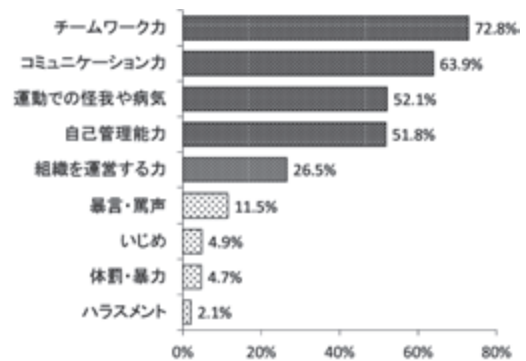


図5 スポーツ活動を通じて身につけたり経験したりしたこと

### (3) みるスポーツ

この1年間にスポーツやダンスなどの試合・公演を競技場などで直接観戦・鑑賞したことがある種目について, 複数回答による結果を表1に示した。男女とも1位, 2位は野球で男性31.3% (264人), 女性20.7% (37人), サッカーは男性21.7% (183人), 女性9.5% (17人)であった。男性の3位はバスケットボール6.0% (51人), 次に陸上競技5.2% (44人), マラソン・駅伝4.4% (37人)と続いた。女性の3位はダンス8.4% (15人), 次にバレーボール7.3% (13人), 陸上競技5.6% (10

人)、バスケットボール 5.6% (10 人) と続いた。観戦したことがないと回答した者は男性 28.8% (243 人)、女性 40.8% (73 人) であった。

表 1 過去 1 年に直接観戦・鑑賞したスポーツ種目

男性			女性		
種目	割合	人数	種目	割合	人数
1 野球	31.3%	264	1 野球	20.7%	37
2 サッカー	21.7%	183	2 サッカー	9.5%	17
3 バスケットボール	6.0%	51	3 ダンス	8.4%	15
4 陸上競技	5.2%	44	4 バレーボール	7.3%	13
5 マラソン・駅伝	4.4%	37	5 陸上競技	5.6%	10
6 水泳	3.7%	31	6 バスケットボール	5.6%	10
7 バレーボール	3.2%	27	7 マラソン・駅伝	3.4%	6
8 ラグビー	3.0%	25	8 水泳	3.4%	6
9 ダンス	2.5%	21	9 フィギュアスケート	2.2%	4
10 剣道	1.8%	15	10 ラグビー	1.7%	3
11 柔道	1.5%	13	11 剣道	1.7%	3
12 大相撲	1.1%	9	12 大相撲	1.1%	2
13 ゴルフ	1.1%	9	13 柔道	1.1%	2
14 フィギュアスケート	0.7%	6	14 障害者スポーツ	1.1%	2
15 障害者スポーツ	0.5%	4	15 ゴルフ	0.6%	1
16 その他	7.0%	59	16 その他	4.5%	8
17 観戦したことがない	28.8%	243	17 観戦したことがない	40.8%	73

スポーツを直接観戦することを妨げる理由について複数回答 (3 つまで) の結果を図 6 に示した。男女全体で最も多かったのは料金がかかる 64.5% (659 人)、2 番目に時間がない 48.1% (492 人)、3 番目に会場が遠い 46.3% (473 人)、次に一緒に行く人がいない 19.1% (195 人)、試合の情報が入りにくい 15.6% (159 人) であった。男女間で違いがあったのは、ルールを知らないが男性 8.3% (70 人) に対し女性 21.2% (38 人) で女性の割合が高かった。

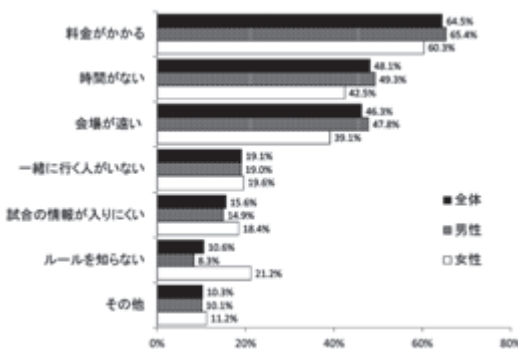


図 6 スポーツを直接観戦することを妨げる理由

スポーツやダンスなどの情報を得るために使用するメディアについて、複数回答による結果を図 7 に示した。男女全体で最も多かったのは TV で 79.5% (813 人)、2 番目はインターネット (SNS) 72.1% (737 人)、3 番目は雑誌 18.7% (191 人)、4 番目は新聞 13.3% (136 人) であった。男女間で差がみられたのは、雑誌で女性は 6.7% (12 人) に対し男性は 21.2% (179 人) であった。

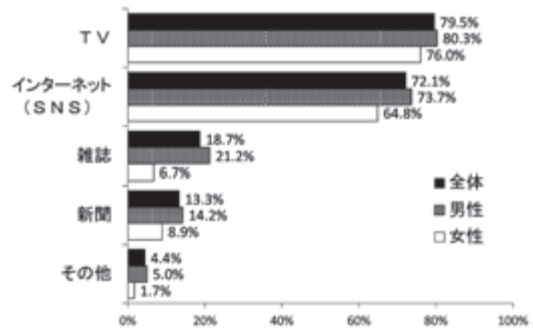


図 7 スポーツに関する情報を得るためのメディア

#### (4) ささえるスポーツ

この 1 年間で経験したスポーツ・ボランティアについて、複数回答による結果を図 8 に示した。男女全体で最も多かったのはスポーツの審判 14.0% (143 人) であり、2 番目はスポーツの指導 9.6% (98 人)、3 番目は大会・イベントの運営や世話 7.6% (78 人)、次に団体・クラブの運営や世話 5.9% (60 人) であった。男女間で差があったのは、スポーツの審判で男性は 15.3% (129 人) に対し女性は 7.8% (14 人) であった。この 1 年に経験したことがないと回答したものは、全体で 67.4% (689 人)、男性 65.4% (551 人)、女性 77.1% (138 人) であった。

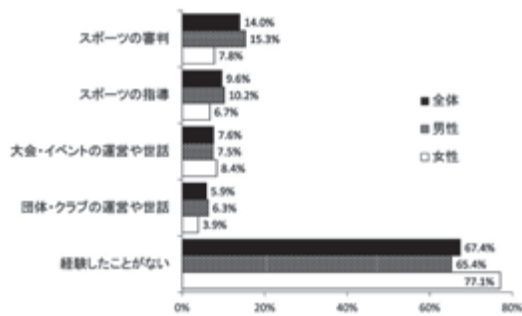


図8 過去1年間に経験したスポーツ・ボランティア

やってみたいと思うスポーツ・ボランティアについて複数回答による結果を図9に示した。男女全体で最も多かったのは大会・イベントの運営や世話 20.4% (208人) で、2番目にスポーツの指導 17.0% (174人)、3番目に団体・クラブの運営や世話 11.0% (112人)、次にスポーツの審判 10.5% (107人) であった。男女間では、大会・イベントの運営や世話では、女性が 34.6% (62人) に対し、男性は 17.3% (146人)、団体・クラブの運営や世話では、女性が 17.9% (32人) に対し男性は 9.5% (80人) であり、女性は男性よりも運営や世話のスポーツ・ボランティアに対して興味関心が高いことが示された。どれもしたいと思わない者は男女全体で 54.6% (558人) であった。

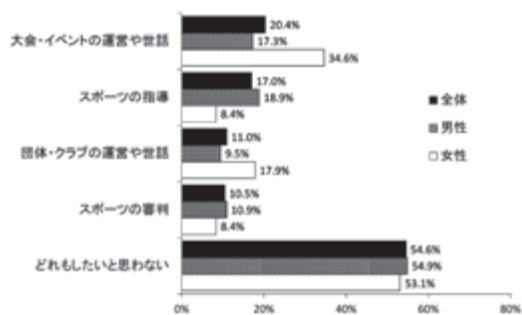


図9 やってみたいと思うスポーツ・ボランティア

スポーツ・ボランティアをしたいと思っているのにできない理由について、複数回答による結果を図10に示した。男女全体で最も多かったのは時間がない 31.4% (321人)、2番目は情報が手に入りにくい 17.4% (178人)、3番目は会場が遠い、経費がかかるがともに 11.5% (118人)、一緒に行く人がいない 10.1% (103人) であった。

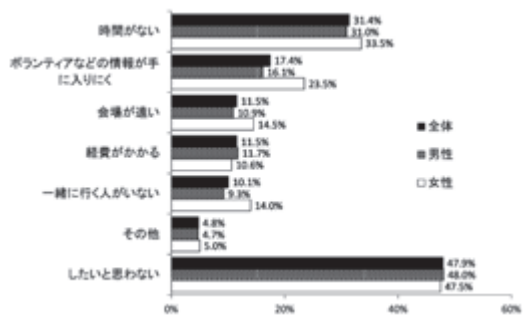


図10 スポーツ・ボランティアをできない理由

#### (5) 大学スポーツ・東京オリンピック・パラリンピックに対する意識

大学がスポーツ推薦や強化指定運動部などで競技スポーツに力を入れることについて自分の大学についてどう思うかの結果を図11左に示した。賛同できる 42.5% (434人)、おおむね賛同できる 43.2% (441人) を合わせた 85.7% は、大学がスポーツに力を入れることに対して前向きな考えであった。運動部学生に対する学習支援やキャリア支援について自分の大学についてどう思うかの結果を図11右に示した。賛同できる 50.8% (519人)、おおむね賛同できる 38.9% (398人) を合わせた 89.7% は、運動部学生への学習面や就職面でのサポートに対して前向きな考えであった。

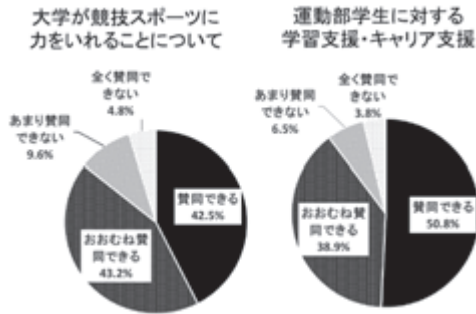


図 11 大学における競技スポーツに対する意識

オリンピック・パラリンピック東京大会(2020年)を直接、競技場で観戦したいかについての結果を図12に示した。オリンピック東京大会について、そう思う48.8%(499人)、ややそう思う22.6%(231人)を合わせた71.4%は直接観戦したいと思っていた。パラリンピック東京大会について、そう思う25.7%(263人)、ややそう思う21.8%(223人)を合わせた47.6%は直接観戦したいと思っていた。

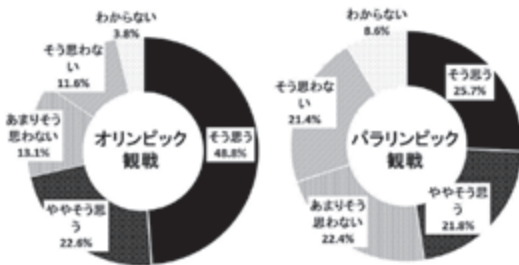


図 12 オリンピック・パラリンピック東京大会の観戦の希望

オリンピック・パラリンピック東京大会(2020年)で大会開催の運営やボランティアの希望の結果を図13に示した。オリンピック東京大会について、そう思う21.8%(223人)、ややそう思う22.4%(229人)を合わせた44.2%はしたいと思っていた。

パラリンピック東京大会について、そう思う16.6%(170人)、ややそう思う20.2%(206人)を合わせた36.8%はしたいと思っていた。

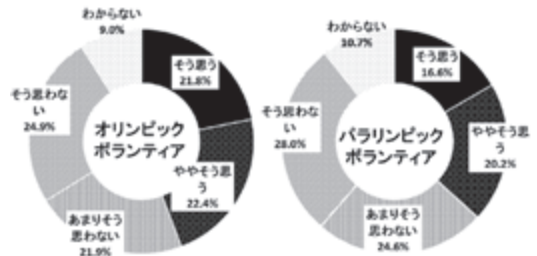


図 13 オリンピック・パラリンピック東京大会のボランティアの希望

#### 4. 考察

本研究では理工学部保健体育科目の履修学生を対象に、スポーツへの参与形態として、する・みる・ささえるの観点から、スポーツとどのような関わりを持ち、意識をしているのかを明らかにするために調査を行った。

する・みる・ささえるの相互関係について検討した結果、するのみは2.2%、ささえるのみは5.2%であり、これらを単独で行う対象者は少なく、する、ささえるは、みる行為とセットで実施され相互に関わりがあることが示された。みる行為のみを行う者は37.3%と最も高い割合であり、みるけれども、実際には行わない、ささえないという対象者が多く占めており「みる」は他の行為とは独立して行われているケースが多いことが示唆された。本調査の結果を笹川スポーツ財団が行った10～19歳を対象とした全国調査データ<sup>5)</sup>と比較すると、する・みる・ささえるの3要素が揃っ



た割合は本調査では 7.0%であったのに対し、全国調査では 5.4%、さらにする・みる・ささえるの 3 要素がどれも該当しない無関心層の割合は、本調査が 23.1%に対し、全国調査では 36.7%であり、本学部の学生はスポーツへの関心が比較的高く、スポーツとの関わりを持っている者の割合が高いことが示された。

するスポーツについて、運動・スポーツの取り組みについて、週 2 回以上 6 ヶ月以上の割合は、男性では 17.3%、女性では 8.4%であった。平成 27 年「国民健康・栄養調査」では運動習慣者は 1 回 30 分以上、週 2 回以上、1 年以上継続と定義されているが、20 歳代の運動習慣者は男性 17.1%、女性 8.3%と報告されており、ほぼ同様の結果であった。本調査の対象者は大学 1 年生の 18, 19 歳を対象としているが、20 歳代を対象とした国民健康栄養調査の結果と同様の割合であったことが示された。本調査の結果を含む全国大学体育連合が行った 14 大学・2 短期大学の 5,861 人のデータ<sup>6)</sup>では、週 2 回以上 6 ヶ月以上の運動習慣者の割合は男性 42.0%、女性 21.3%であった。この調査の大学 1 年生に限定したデータでも男性 32.5%、女性 17.6%であったため、本学部学生の運動習慣者の割合は他大学と比べると低いと言える。男女の比較では、男性は女性より運動習慣者の割合が高く、運動無関心層の割合では女性は男性の 1.7 倍ほど高かった。近年、身体不活動は全世界の死亡者数に対する 4 番目の危険因子（リスクファクター）として認識されており<sup>7)</sup>、WHO の国際勧告 2010<sup>8)</sup> は、18～64 歳に分類される成人は、週あたり 150 分の中強度の有酸素性

身体活動、または週あたり 75 分の高強度の有酸素性身体活動が推奨されている。わが国の身体活動基準 2013<sup>9)</sup> では 18～64 歳において、強度が 3 メッツ以上の身体活動を 23 メッツ・時/週行うことが示されている。これらのことから、在学中に運動習慣を身につけさせることは生涯の健康維持増進のために重要であると言える。

本学部学生とするスポーツの実践者は少ないことを先に述べたが、図 4 に示した過去における運動・スポーツの継続者では、小学生 74.8%、中学生 82.8%、高校生 63.1%、大学生 21.1%と高校生から大学生になった途端に運動習慣者の割合が激減していた。その背景には、受験勉強を経て、専門学科における学業への注力、大学生になってアルバイトを始めたこと、運動・スポーツの実践への興味・関心の低下などが考えられる。しかしながら、スポーツ活動を通じてチームワーク力、コミュニケーション力、自己管理能力、組織を運営する力が身についたと一定の割合で回答している（図 5）。これらの能力は文部科学省が中央教育審議会答申<sup>10)</sup> で示した学士力に関する主な内容で示された「汎用的技能」「態度・志向性」のコミュニケーションスキル、自己管理力、チームワーク、リーダーシップなどと合致する。また、本学部のディプロマポリシー、カリキュラムポリシーにもコミュニケーション能力、リーダーシップ、協働力について明言されている。したがって、スポーツは健康増進への貢献のみならず、高等教育機関においても重要な教育的意義があると言える。大学からは専門分野に特化した知識偏重という考え方ではなく、保健体育科目を通じて、上

記に示した能力を身につけさせるためにも教育内容の工夫、環境整備が重要であろう。文部科学省では平成 25 年 5 月に「運動部活動での指導のガイドライン」<sup>11)</sup>を公表しているが、スポーツ場面において暴言・罵声、体罰・暴力、いじめ、ハラスメント等の経験をした者も少数ではあるが含まれており、中学、高校における部活動のあり方については、未だ改善の余地があると言える。

みるスポーツについては、野球、サッカー、バスケットボール、ダンスなどが上位を占めた。日本版 NCAA 構想では見るスポーツの価値を高め、放映権、チケット収入などで得た収益を競技団体、大学などに還元しスポーツ環境を改善することが検討されている<sup>3)</sup>。本研究で示した過去に実際にみたスポーツの種目ごとの統計データやみるスポーツの障害要因は、みるスポーツの普及を検討する際に参考になると考えられる。先進的な事例として、みるスポーツをスポーツ文化の理解を深めるための教材として、教員と学生が実際に現場に足を運び大学教育に活用している例もある<sup>12)</sup>。杉本<sup>13)</sup>はスポーツをみるという行為は興奮を求める社会的行為であるが、TVを代表するメディアを通して視聴するのは「見る」と表現されるのがふさわしく、実際に競技会場でみる場合は「観る」と表現し、スポーツを観ることは空間を共有していると述べている。IOC（国際オリンピック委員会）は、スポーツの価値の一つに卓越性を挙げており、会場で選手と空間を共有してこそ感じることもあるのではないかとと思われる。

ささえるスポーツについて、67.4%は

過去 1 年間にその経験がないと回答していた。ささえるスポーツ経験の上位は、スポーツの審判 14.0%、スポーツの指導 9.6%であったが、審判や指導はそのスポーツ種目に精通していないとできないと思われる。やってみたいスポーツ・ボランティアでは、大会・イベントの運営や世話が 20.4%で女性においては、34.6%が興味関心を持っていることが示された。したがって、図 10 で示した障害要因、とりわけ情報の入手や仲間づくりなどは解決できる可能性があるため、これらの課題に対して取り組むことが有効になると考えられる。ささえるスポーツについて大学教育に取り入れている例が報告されており、地域のスポーツ教室、マラソン大会などの学生ボランティア活動を通じてマネジメントについて学ぶ機会を提供している<sup>14)</sup>。

本研究の課題と限界点は、本学理工学部 1 年生の特徴を表しており一般化は出来ないことが挙げられる。

## 5. まとめ

ここまで、する・みる・ささえるスポーツのそれぞれについて在学生の関わり方、意識、課題について議論してきた。大学体育の可能性として、従来はするスポーツのみを行ってきたが、みるスポーツ、ささえるスポーツについても検討する余地がある。本学部の学生は、高い割合で大学の競技スポーツへの理解を示し、オリンピック・パラリンピック 2020 についても、みる、ささえる行為に一定の割合で興味を示している。例えば、本学の陸上競技部は全日本インターカレッジ 6 連覇（2017 年現

在), 野球部は 2016 年秋季東都大学リーグ優勝など競技スポーツのレベルはわが国の大学トップレベルにある。これらの大学スポーツを「みる」という視点で教養体育と融合させられる可能性もある。あるいは, 東京オリンピック・パラリンピックに向けてのボランティア活動, サークル活動を通じてささえるスポーツを題材として, そのマネジメントやリーダーシップについて学問的に再考することもできる。本調査結果を如何に今後の教養教育に生かしていくのが重要であろう。

## 文献

1. 文部科学省. スポーツ立国戦略—スポーツコミュニティ・ニッポン—, 2010.
2. 文部科学省. スポーツ基本法, 2011.
3. 文部科学省. 大学スポーツの振興に関する検討会議最終とりまとめ—大学のスポーツの価値の向上に向けて—, 2017.
4. 文部科学省. 運動部活動の在り方に関する調査研究報告書. 運動部活動の在り方に関する調査研究協力者会議, 2013.
5. 笹川スポーツ財団. 青少年のスポーツライフ・データ 2015-10 代のスポーツライフに関する調査報告書, 2015.
6. 大学体育連合. 大学生のスポーツ経験と意識に関する調査報告書, 2017.
7. Wen CP, Wu X. Stressing harms of physical inactivity to promote exercise. *Lancet*;380 (9838): 192-193, 2012.
8. 健康のための身体活動に関する国際勧告 (WHO) 日本語版. 宮地元彦, 久保絵里子 (訳), 2012.
9. 厚生労働省. 運動基準・運動指針の改訂に関する検討会. 健康づくりのための身体活動基準, 2013.
10. 文部科学省. 「学士課程教育の構築に向けて」中央教育審議会答申の概要, 2009.
11. 文部科学省. 運動部活動での指導のガイドライン, 2013.
12. 荒井啓子. 「見るスポーツ」の教育実践: スポーツ文化研究ゼミの取り組み. *大学体育*; 107: 119-121, 2016.
13. 杉本厚夫. スポーツを「観る」ことと「視る」ことの相克. *スポーツ社会学研究*; 25-1: 35-47, 2017.
14. 中川直樹. 「体育教員によるスポーツ産業との連携」と「支えるスポーツに関する教育実践」. *大学体育*; 107: 122-124, 2016.

# 川端画学校の中国人留学生について

周 一 川

(平成 29 年 7 月 13 日受理)

## On Chinese Students at the Kawabata Painting School

By Yichuan ZHOU

(Accepted July 13, 2017)

近代中国人留日美術学生についての調査研究の成果は、中国絵画史研究で著名な鶴田武良の「留日美術学生 一近百年來中国絵画史研究 五一」<sup>1</sup> などがある。近年では美術学校の学籍簿などを頼りにして、学校別の研究成果<sup>2</sup> も見られるようになった。

筆者が川端画学校の中国人留学生名簿を明らかにしようと考えたきっかけは、日華学会の各年度（1927-1944年）の中国人留学生名簿（以下日華学会名簿と略す）を集めたことにある。

鶴田武良は、かつて川端画学校に留学していた学生の実事確認が困難である理由について次のように指摘している。「すくなくならぬ中国人美術学生が学んだ太平洋美術学校、川端画学校のように、戦災によって学籍関係書類を焼失し、在籍を確かめる方法がないところもある。」<sup>3</sup>

その後、全部焼失されたと思われていた川端画学校の洋画部入学者リスト『記名簿』の一部は、江川佳秀により発見された。それは、江川佳秀が同校関係者の遺品調査を行う過程で見つけたもので、川端画学校洋画科の実質的な責任者であった富永勝重が避難させたものである<sup>4</sup>。そこで発見された『記名簿』は、1913年9月－1920年12月、1924年6月－1931年2月のものであり、これにより十数年分の留学生名簿が明らかになった。本稿では、江川が整理し作成したリストに多少の変更を加えた上で、この『記名簿』を紹介することにした。

また拙論「中華民国時期における留日美術学生の名簿と史料分析－1923, 1925, 1927～1944年－」<sup>5</sup> には川端画学校の留学生リストも作成したが、データ集計するときにミスをした（1928年度のデータを間違えて1927年度のデータにした）ところがあり、本稿で修正した。さらに『中国留日学生監督處文献』<sup>6</sup> の統計データを使用したことにより、10年代に在学した留学生も数名判明し、川端画学校留学生名簿はさらに詳しくなったのである。

本稿により川端画学校留学生の基本データの一部を明らかにすることで、近代日中文化

交流史・美術史研究者各位にささやかながら研究の手がかりを提供することができたら幸いである。

## 一. 洋画部『記名簿』にある中国人留学生

まず川端画学校についてであるが、1909年に日本画家の川端玉章により創立された。当初は日本画家を養成する目的であったが、川端玉章が亡くなってから1913年に洋画科を併設して、川端絵画研究所と改称した。1917年に再び川端画学校の旧称に復した。その学校は、日本の美術界の大きな存在であり、著名な日本画家と洋画家などを輩出した私立美術学校であると同時に、この学校を経て、東京美術学校に進学した者もかなり多く、美術学生の懂れている東京美術学校（現・東京芸術大学）の受験予備校という側面もあった。そして、大正時代から川端画学校には数多くの中国人留学生も在学していた。

次に江川佳秀が作成したリストについて。江川は川端画学校（川端絵画研究所）洋画部『記名簿』に基づいた中国人留学生リスト（以下「江川佳秀名簿」を称す）を作成した。それは江川の「中国人画学生たちが学んだ場所—特に川端画学校と太平洋画会研究所を中心に」<sup>7</sup>に収められており、その中に台湾留学生も含まれている。同文には、「『記名簿』の原本は入学申込者がそれぞれ自筆で記帳したものである。一部正当性を欠く表記があるが、原文を尊重した。」という説明がある。「その後の進路」の部分と[ ]は江川佳秀が補った内容であり、■は判読不能の文字である。

<表1>は、江川佳秀名簿に基づいて作成したものだが、書式を修正し、本籍に省（台湾留学生の場合は、市、州、県、郡）を記し、詳細な帰省先や下宿住所などは省略したものである。江川佳秀名簿で記入されていた年齢は、さまざまな表記（～才、～歳、西暦、宣統、民国、明治など）であったが、<表1>ではアラビア数字だけで年齢を表すことにした。しかし、中国人は数え年を使用する習慣があることから、<表1>に記している年齢は数え年と満年齢が混在しており、おおよそのものである。

それに後述の日華学会と監督処の統計対象（台湾留学生は含まれていない）を照合しやすくなるため、中華民国留学生と台湾留学生を<表1-1>（中華民国留学生）と<表1-2>（台湾留学生）に別々に作成することにした。

<表1-1> 洋画部『記名簿』(1913.9-1920.12;1924.6-1931.2)を基に作成した江川佳秀名簿（中華民国留学生）

序号	入学年度	氏名（年齢）	本籍	その後の進路
1	1915年[1-2月頃]	王 霏	四川	
2	1915年[12月]	沈逢吉	江蘇	
3	1916年2月23日	陳洪鈞	広東	後の陳抱一。除名後、1918年1月再入学
4	1916年[9-12月頃]	汪亜塵	浙江	1922年5月東京美術学校西洋画科選科卒
5	1916年[9-12月頃]	用鐘傑	広東	
6	1917年[4-5月頃]	常幼書	四川	
7	1917年5月1日	費德堃	江蘇	1922年3月東京美術学校西洋画科選科中退

8	1917年[5-7月頃]	馬宗敲	四川	
9	1917年[5-7月頃]	伍子奇	広東	1922年6月東京美術学校西洋画科選科卒
10	1917年[5-7月頃]	黄扶	江蘇	
11	1917年[7-9月頃]	羅仲謙	四川	
12	1917年[7-9月頃]	王光	江西	
13	1917年[10月]	夏伯鳴	浙江	1923年3月東京美術学校西洋画科選科中退
14	1917年10月16日	楊士毅	陝西? *1	
15	1918年[1月]	胡上崎	湖南	
16	1918年1月17日	陳洪鈞	未記入	再入学。1921年3月東京美術学校西洋画科選科卒
17	1918年4月9日	孫朱坤	浙江	
18	1918年4月16日	周耕雲	浙江	
19	1918年4月22日	高春榮	直隸	1923年3月東京美術学校西洋画科中退
20	1918年9月24日	朱增鈞	江蘇	
21	1918年[11月]	王璟	浙江	
22	1918年12月6日	王方毅	直隸	
23	1919年1月6日	陳元澣	広東	1924年6月東京美術学校西洋画科卒(外国人特別学生)
24	1919年2月5日	譚華牧	広東	1924年6月東京美術学校西洋画科卒(外国人特別学生)
25	1919年[3月]	趙載泗	福建	1924年3月東京美術学校西洋画科中退
26	1919年4月28日	何三峯	広東	
27	1919年[6月]	雷公賀	広東	1924年6月東京美術学校西洋画科卒(外国人特別学生)
28	1919年10月1日	胡桂馨	■■	
29	1919年11月10日	敖華國	広東	
30	1920年[2月]	蔡戡	湖北	
31	1920年2月14日	鄭書麟	貴州	
32	1920年[3月]	隨燐	奉天	
33	1920年[3月]	黄涵秋	江蘇	
34	1920年4月2日	張境	湖北	1925年3月東京美術学校西洋画科選科中退
35	1920年[4月]	王道源	湖南	1926年4月東京美術学校西洋画科卒(外国人特別学生)
36	1920年[4-5月頃]	陳懷仁	直隸 *2	
37	1920年7月3日	余蘭初	広東	1925年3月東京美術学校西洋画科中退
38	1920年10月4日	衛天霖	山西	1926年3月東京美術学校西洋画科卒(外国人特別学生)
39	1920年[11月]	勝固	江蘇	
40	1924年[10月]	李裕楨(25?)*3	湖南	
41	1924年[10月]	田申(24?)*4	山東	
42	1924年12月1日	葉仲豪(20)	広東	1925年3月東京美術学校西洋画科中退
43	1925年1月9日	張逸飛	雲南	
44	1925年[1-2月頃]	曾祥熊(22)	湖南	
45	1925年[4-5月頃]	伍惠明(22)	広東	
46	1925年[4-5月頃]	李兆欽(25)	広東	
47	1925年[5-8月頃]	李孟書(28)	江蘇	
48	1925年[8-9月頃]	張孝東(24)	湖南	
49	1925年[8-9月頃]	曾一亭(23)	福建	
50	1925年[8-9月頃]	鄭文田(24)	福建	
51	1925年[8-9月頃]	李潔永(23)	広東	1929年日本美術学校卒業者に「李潔泳」がいる
52	1926年[1-4月頃]	魏瑞芝	浙江	1930年日本美術学校西洋画科卒
53	1926年[1-4月頃]	饒祚(25)	江西	1926年3月日本美術学校卒。同校卒業前後に川端画学校に入学
54	1926年[1-4月頃]	翁元春(21)	広東	
55	1926年[1-4月頃]	翁德備(24-25)*5	広東	
56	1926年[1-4月頃]	周虞琛(22)	安徽	

57	1926年[1-4月頃]	朱 光 (26)	江蘇	
58	1926年[9-11月頃]	陳乃光 (21)	広東	
59	1926年[11月頃]	儲致中 (20)	江蘇	
60	1926年[11月頃]	琴台山人 (26)	湖北	
61	1927年[1月]	龔遂初 (22)	江蘇	
62	1927年[2-3月頃]	方 昶	江西	
63	1927年[6月頃]	郭谷老 (26)	江蘇	
64	1927年[9-10月頃]	何德温 (22)	安徽	
65	1927年[9-10月頃]	余 省 (24)	福建*6	
66	1927年[9-10月頃]	劉克昭 (25)	広東	
67	1927年[10-11月頃]	倪貽德 (25)	浙江	
68	1927年[11-12月頃]	陳 洵 (22)	江蘇	1934年3月東京美術学校油画科卒 (外国人特別学生)
69	1928年1月7日	王文博 (23)	山東	1933年3月東京美術学校洋画科卒 (外国人特別学生)
70	1928年[1月]	馬君雄 (21)	広東	
71	1928年[2月]	陳盛鐸 (25)	江蘇	
72	1928年[2月]	陳 迹 (21)	広西	
73	1928年[3-4月頃]	何乃澤 (33)	広東	
74	1928年[4-5月頃]	陳■■■ (23)*7	四川	
75	1928年[4-5月頃]	周 汰 (25)	浙江	
76	1928年[4-5月頃]	胡佐郷 (27)	浙江	
77	1928年[4-5月頃]	陳仲夔 (30)	江蘇	
78	1928年[4-5月頃]	沈學誠 (24)	浙江	
79	1928年[5月]	符樹明 (21)	広東	
80	1928年[7-4月頃]	林臺俊 (23)	広東	
81	1928年[7-4月頃]	呉體正 (20)	四川	
82	1928年[7-4月頃]	周存憲 (21)	四川	
83	1928年[7-4月頃]	司徒慧敏 (19)	広東	1934年3月東京美術学校工芸科図案部中退 (外国人特別学生)
84	1928年[7-4月頃]	郭呈瑞	福建	
85	1928年[7-4月頃]	鄒夢誠 (20)	広東	
86	1928年[7-4月頃]	石鍊頑 (23)	江西	
87	1928年[7-4月頃]	路 彦 (20)	直隸	
88	1928年[7-4月頃]	梁 海 (22)	広東	
89	1928年[7-4月頃]	梁空靈 (字耀南) (?) *8	浙江	
90	1928年[7-4月頃]	朱天寬 (20)	浙江	
91	1928年[7-4月頃]	陳森蓮 (20)	広東	
92	1929年[4月]	李益立 (21)	福建	
93	1929年[4月]	舒榮鏡 (22)	浙江	
94	1929年[4月]	蔡淑馨 (22)	浙江	1929日本美術学校卒業者に「蔡淑馨」がいる
95	1929年5月6日	李家治 (18)	広東	
96	1929年5月13日	秦君烈 (29)	四川	
97	1929年5月13日	何明新 (21)	四川	
98	1929年6月4日	黄君策 (21)	四川	
99	1929年6月4日	方人定 (26)	広東	
100	1929年[6月]	黄懷信 (21)	福建	
101	1929年7月2日	周輕鼎 (28)	湖南	
102	1929年9月20日	陳精業 (26)	四川	
103	1929年[10月]	邱碧珍 (22)	福建	
104	1929年10月15日	林乃幹 (22)	広東	1935年3月東京美術学校油画科卒 (外国人特別学生)

105	1929年10月18日	蘇孝道 (22)	福建	
106	1929年10月18日	鐘惠若 (21)	広西	1935年3月東京美術学校油画科中退
107	1929年10月18日	譚謙勳 (22)	広東	1935年3月東京美術学校油画科中退
108	1929年10月29日	黎希夷 (21)	四川	
109	1929年11月1日	伍法蘭 (21)	広西	
110	1929年11月6日	莊善章 (20)	山東	
111	1929年11月7日	朱光輝 (21)	江蘇	
112	1929年12月2日	向 真 (23)	貴州	
113	1930年1月18日	任 重 (22)	広東	
114	1930年[1月]	王之英 (32)	浙江	
115	1930年2月3日	李濂岫	安徽	
116	1930年3月22日	張印方 (26)	河北	1930年3月日本美術学校卒。同校卒業とほぼ同時に川端画学校入学
117	1930年4月18日	劉素君 (23)	四川	
118	1930年6月7日	夏宏武 (24)	浙江	1929年3月日本美術学校卒業後、川端画学校に入学
119	1930年10月2日	易 浩 (20)	湖南	
120	1930年10月14日	李頤塵 (22)	遼寧	1936年3月東京美術学校工芸科图案部中退 (外国人特別学生)
121	1930年12月5日	李俊英 (24)	広東	
122	1930年12月5日	梁益堅 (27)	広東	
123	1931年1月6日	胡光弼 (22)	広東	1939年3月東京美術学校彫刻科塑像部中退
124	1931年1月7日	李毓麟 (21)	遼寧	
125	1931年[1月]	葉扁舟 (21)	安徽	
126	1931年2月3日	蔣 玄	浙江	1936年3月東京美術学校彫刻科塑像部中退

\*1 原名簿に「清西省安康県」と書いてある。中国には清西省はなく、安康県は陝西省の県である。

\*2 原名簿に「真隸省安康県」と書いてある。<表4>に同一人物の本籍に「直隸撫寧」と記録しているので、「真隸省」は直隸省の間違いと思われる。

\*3 原名簿に「二十五年」と書いてある。25歳の間違いと推測される。

\*4 原名簿に「二十四年」と書いてある。24歳の間違いと推測される。

\*5 原名簿に「1901年1月5日」と書いてある。生年月日を記入した留学生は、入学月日がはっきりしない場合(例:1-4月頃)、正確な年齢が判断できないので、推測の年齢(例:(24-25))になる。

\*6 原名簿に「厚門口間」と書いてあるが、<表3>に同一人物の本籍に福建と記録している。「厚門」は、厦門の間違いと思われる。

\*7 <表3> 1928年度の留学生リストにある序号9の陳蒲綿も四川省出身で同じ人物だと考えられる。

\*8 原資料に「明治4年2月11日」と書いてある。57歳の計算になるので、明治40何年の記入ミスと考えられる。

<表1-2> 洋画部『記名簿』(1913.9-1920.12;1924.6-1931.2)を基に作成した江川佳秀名簿(台湾留学生)

序号	入学年度	氏名(年齢)	本籍	その後の進路
1	1916年9月1日	劉錦堂	台中	後の王悦之。1921年3月東京美術学校西洋画科選科卒
2	1919年[3月]	黃溪泉	台南	
3	1920年[7月]	呂靈石	台中	
4	1925年[3月]	張舜卿 (28)	台南	1931年3月東京美術学校西洋画科卒(外国人特別学生)
5	1925年[8-9月頃]	王仁禮 (15)	台北	
6	1926年[1-4月頃]	郭柏川	台南	1933年3月東京美術学校西洋画科卒(外国人特別学生)
7	1926年[1-4月頃]	林英貴 (19)	嘉義	
8	1927年[2-3月頃]	陳慧坤 (19)	台中	1931年3月東京美術学校図画師範科卒
9	1927年[2-3月頃]	張舜卿	嘉義	
10	1927年[9-10月頃]	黃連登 (20)	台南	
11	1927年[11-12月頃]	林清江 (27)	台南	
12	1928年[1月]	劉啓祥 (17)	台南	文科学院洋画科卒



13	1928年[3月]	陳壯成 (26)	台南	
14	1928年[3月]	賴金樑 (21)	台中	
15	1928年5月16日	黃添成 (30)	台中	
16	1928年[7-4月頃]	黃碧玉 (24)	台南	
17	1928年[7-4月頃]	李海樹 (26)	台北	1934年3月東京美術学校油画科卒 (外国人特別学生)
18	1928年[7-4月頃]	李石樵 (20)	台北	1936年3月東京美術学校油画科卒
19	1928年[7-4月頃]	周宣銘 (15-16)*1	新竹	
20	1928年[7-4月頃]	林錦鴻 (22-23)*2	彰化	
21	1929年4月26日	廖寶松 (21)	台南	
22	1929年5月13日	周義成 (21)	台南	
23	1929年[7-8月頃]	邱潤銀 (18)	高雄	帝国美術学校在学中, 多摩美術学校に転校して同校卒
24	1930年6月3日	余進登 (18)	高雄	
25	1930年7月29日	林兆楨	高雄	
26	1930年[9月]	洪陸參 (21)	台南	
27	1930年10月1日	洪瑞麟 (18)	台北	1935年度帝国美術学校本科西洋画科卒
28	1930年[12月]	陳德旺 (21)	台北	

\*1 原名簿に「大正2年8月1日」と書いてある。

\*2 原名簿に「明治38年8月9日」と書いてある。

## 二. 日華学会名簿に載る川端画学校の中国人留学生 (1925年度, 1928-1940年度)

1918年に成立した日華学会は、1927年から1944年まで毎年中国人留学生に関する調査を行い、18冊の名簿を出版した。またそれ以前にも1923年度と1925年度に中国人留学生名簿を作成している。日華学会名簿は、政局の変化により何度も名称を変えた。第1版(1927年)から6版までは、『留日中華学生名簿』であったが、「満洲国」が成立したため、第7版から10版までは、『留日学生名簿』に、第11版から13版までは『中華民國・満洲国留学生名簿』となった。さらに1935年からは「駐日満洲国大使館」が留学生の統計を取り始めて『満洲国留日学生録』を発行したので、日華学会は第14版から中華民國留学生だけを調査することにし、『中華民國留日学生名簿』と改称した。

日華学会は20年代初めから1944年までの20年余り中国人留学生名簿を作成し続けたので、学校別にかなり詳細な留学生データを記録していた。それは近代における中国人留学生研究にとっては不可欠の資料と言える。

日華学会名簿のデータは、各学校から提供された内容をまとめたものであり、信ぴょう性が高く、「準第一次資料」と言えるだろう。しかし、すべての留学生の在籍していた学校のデータが揃うことは難しく、年度により収録していない学校もあり、不完全統計でもある。幸い、各年度の日華学会名簿に殆ど川端画学校分が収録されており、次のような表を作成することができた。

なお、そのうちの〈表2〉は、外務省外交史料館に1927年以降のように公開されていない日華学会作成の中国人留学生名簿1923年度と1925年度の二冊があるうちの、川端画学校の留学生名が載っている1925年度から拾った。

&lt;表 2&gt; 日華学会名簿に載る 1925 年度在籍中国人留学生

学科	省籍	官公私費別	姓名	年齢	男女別	備考
洋画科	江蘇		李孟書	28	男	白山御殿町中華基督教青年会
〃	福建		曾一亭	23	〃	本郷, 弓町一ノ三, 玉川館
〃	〃		鄭文田	24	〃	〃
〃	広東		李潔氷		女	〃
〃	〃		李兆欽	25	男	市外古塚町六二六港館
〃	〃		伍恵明	22	〃	市外下古塚三五四松葉館
〃	〃		葉仲豪	20	〃	〃
〃	江蘇		徐祖馥		女	麻布, 箆笥町六
〃			黄鴻紹		男	

<表 2>の書式などは、原資料の写しである。

出典：財団法人日華学会『東京在住中華民国留学生名簿』大正 14 年 11 月現在（外務省『在本邦留学生関係雑件 別冊 支那留学生部』第 2 巻）

『記名簿』には<表 2>（1925 年度）の名前が全員あると推測していたが、<表 1-1>と照合したところ、徐祖馥と黄鴻紹の二名が『記名簿』に記名がないことが判明した。

<表 2>に記載されている葉仲豪は、『記名簿』（<表 1-1> 序号 42）に記名しているのが 1924 年 12 月 1 日であり、つまり、1924 年末から、川端画学校に在籍している。その後、葉仲豪は、1926 年 4 月 5 日に特別学生として東京美術学校西洋画科に入学したことと、在学中に中国人留学生の左翼組織「社会科学研究会」に所属し、1929 年 10 月の東京特支事件の際に逮捕され、強制送還されたことが吉田千鶴子の研究<sup>8</sup>に記されている。さらに、日華学会名簿の各年度の東京美術学校留学生リストから、葉は 1929 年から「省官費」留学生<sup>9</sup>になったことがわかった。

日華学会は、上述のように 1927 年から毎年中国人留学生に関する調査を行い 1944 年まで 18 冊の名簿を出版しているが、1927 年度には川端画学校は収録されていないので、<表 3>は日華学会留学生名簿の 1928 年度のデータから川端画学校分をまとめて作成した。

&lt;表 3&gt; 日華学会名簿に載る 1928～1940 年度在籍中国人留学生

序号	氏名	出身地	学科	経費*1	在籍年度
1	鄭興煥	湖北	洋画科	自→官	1928-1929
2	余 省	福建	洋画科	自	1928
3	劉克昭	広東	洋画科	自	1928
4	倪貽徳	浙江	洋画科	自	1928
5	陳 洵	江蘇	洋画科	自	1928
6	馬君雄	広東	洋画科	自	1928
7	陳盛鐸	江蘇	洋画科	自	1928
8	陳 迹	広西	洋画科	自	1928
9	陳蒲綿	四川	洋画科	自	1928
10	周 汰	浙江	洋画科	自	1928

11	胡佐郷	浙江	洋画科	自	1928
12	何乃澤	広東	洋画科	自	1928
13	沈学誠	浙江		文化特選	1929
13	呉体正	四川		自	1929
14	李益正	福建		自	1929
15	李家治	広東		自	1929
16	秦君烈	四川		自	1929
17	何明新	四川		自	1929
18	蔡淑馨 (女)	浙江		官	1929-1930
19	林栄俊	広東		自	1929
21	夏宏武 (女)	浙江		官	1930
22	劉素君	四川		自	1930
23	張印方 (女)	河北	石膏部	官	1930-1931, 1932 (婦国中)
24	陳精業	四川		自	1930
25	陳成華 (女)	広東	人体科, 人体部	自	1931, 1932 (婦国中)
26	李益立	福建	人体科, 石膏部	自	1931, 1932 (婦国中)
27	時昭滯 (女)	湖北	石膏部	自	1931, 1932 (婦国中)
28	黎希夷	四川	人体部	自	1931, 1932 (婦国中)
29	符樹明	広東	石膏部	自	1932 (婦国中)
30	胡光弼	広東	石膏部	自	1932 (婦国中)
31	呉植模	江西	石膏部	自	1932
32	熊汝梅	広東	洋画科人体部	不明	1933
33	李俊英	広東	洋画科人体部	自	1933, 1934 (新学期来缺席)
34	龔遂初	江蘇	洋画科石膏部	不明	1933-1934
35	鄭興煥 *2	湖北	洋画科石膏部	自	1933-1934
36	余鐘志	四川	石膏部	自	1935
37	張錦霓	浙江	人体部	自	1935
38	張華庭	浙江	人体部	自	1935
39	姜謾郎	湖南	石膏部	自	1935
40	田 風	奉天	石膏部	自	1935
41	朱国勤	閩東洲	石膏部	自	1935
42	曹景周	広東	石膏部	自	1935
43	林鑑修	福建	洋画科石膏部	自	1936-1937
44	梁乃安	広東	洋画科石膏部	自	1936
45	阮劍琴	広東	洋画石膏部	自	1937
46	穆瑞祺	山東	洋画石膏部	自	1937
47	孟淑文 (女)	吉林	洋画石膏部	自	1937
48	閻振宇	河北	洋画科	自	1940
49	朱 坤	浙江	洋画科	自	1940

\*1 経費の項目中、自は自費（私費）、官は官費（国費）を指す。また、文化特選とは「対支文化事業」学費補給の大学院レベルを対象とする「特選留学生」のことである。

\*2 序号1と同じ人物だと思われる。

〈表3〉の学科の欄目には空欄があるが、それは1929-1930年度日華学会留学生名簿の川端画学校には学科の記載がないためである。年度により留学生の学科が違う場合は、両方を記入した。日華学会名簿の留学生名前の上に○が付いているのは、帰国中のマークであるが、〈表3〉では、その年度の後ろに（帰国中）と記した。原資料には一人だけ備考欄に「新学期来缺席」と書いてあるので、そのまま〈表3〉に転記した。

日華学会留学生名簿には1931年版のみ川端画学校の学生の性別を記録していて、性別を書いていない年度の性別の判断は、出身校（女子校か否か）などに基づいたもので、不完全な統計である。日華学会の18冊の名簿の内、1941年以降は川端画学校に関する記録がないので、それ以降は留学生の入学がなかったものと考えられる。

〈表3〉の統計時期は1928年から1940年までであり、『記名簿』を基にした〈表1-1〉には1931年2月までのデータであることから、二つの表の同時期のデータを照合したところ、下記の三点を明らかにすることができた。

まず、23名の留学生が両名簿に記載されている。その内〈表3〉の序号2-5の4名は1927年後半に『記名簿』に記名しているので、入学時期は1927年の後半であることがわかった。

次に『記名簿』（1928年-1931年2月）に記名されている中華民国留学生総数は57名とあるが、57名の内に23名しか日華学会名簿に載っていない。つまり、『記名簿』に記名していた半数以上の留学生は、日華学会が調査する6月にはすでに在籍しておらず、一年足らずで学校を離れたことになる。

さらに、日華学会名簿を基にした〈表3〉の1928-1930年度川端画学校留学生数は、24名であるが、このうちには鄭興煥、李益正、林栄俊の三名は『記名簿』には名前がない。

美術留学生たちは、数校の美術学校間での移動が多く見られる。それは、他の専攻の留学生にはあまり見られない特徴である。日華学会の名簿によりわかったのは、次のようである。川端画学校で学んだ後に東京美術学校に入学したのは葉仲豪、林栄俊、胡光弼、田風、朱国勤、朱坤、その逆の移動には熊汝梅と閻振宇がいた。蔡淑馨（著名作家夏衍の妻）、夏宏武、龔遂初は、川端画学校に来る前に日本美術学校に在籍していた。李潔氷は、川端画学校の後に日本美術学校に入学した。<sup>10</sup> 1925年に川端画学校に在籍した徐祖馥は、元は女子美術学校（現・女子美術大学）の学生であり、張印方は、1927年女子美術学校の刺繍科選科を卒業した<sup>11</sup> 後、1929年まで官費生として日本美術学校に在籍し、〈表3〉に記録しているように1930年から川端画学校の学生であった。江川佳秀名簿からも同様の動向が確認できる。

なお、1935-1943年度（1942年度は欠如）の『満洲国留日学生録』を調べたが、川端画学校の学生は一名のみで、それは〈表3〉の序号47の孟淑文（女）である。孟は1937年4月に入学した23歳の自費留学生で、出身校は新京市立女子中等学校<sup>12</sup> である。その後、川端画学校には「満洲国」からの留学生はいないようである。

### 三. 『中国留日学生監督處文献』に記載されている川端画学校の中国人留学生

早稲田図書館所蔵の『中国留日学生監督處文献』と題した一連の資料は、清国游学生監督署と中華民国留日学生監督處が作成した資料からなっている。清国游学生監督署発行の資料には『官報』と『経費報銷冊』があり、中華民国留日学生監督處関係の資料には、さらに30冊を超える年度別・費用別・学校別の名簿（1914-1921年）などがあるが、残念なことに、さまざまな名簿は系統性がなく、留学生が在籍している学校も全部は網羅されていない。

筆者が中華民国留日学生監督處関係の資料（以下監督處資料と称す）のすべての名簿を調べたところ、川端画学校の留学生が数名記録されていることがわかったので、〈表4〉としてまとめた。

〈表4〉 監督處資料（1914-1921）に記載されている中国人留学生

本籍	姓名	学科	年級（在学年度）	費別	出典：監督處資料に付された整理番号
江蘇太倉	朱增鈞	西洋画	一（1918） 二（1919, 1921）	自費	27, 35, 47
江西万安	王 光	西洋画	一（1919） 帰国（1920）	自費	35, 41
湖南	胡上琦	西洋画	二（1919）	自費	35
広東台山	陳元澣	西洋画	一（1919）	自費	35
広東	関 良	西洋画	一（1921）	自費	47
直隸撫寧	陳懷仁	西洋画	（1921）	自費	47

出典：『中国留日学生監督處文献』：整理番号27「7年度自費生調査冊」；35「8年度10月分各省自費生名冊」；41「江西私費生名冊」民国9年11月；47「10年度自費生名冊」。

〈表4〉を作成する際に、本籍、氏名、学科、学年、費別などは、原資料のままに転記したが、年度を西暦に換算して（ ）内に記入した。

監督處資料に最初に記録された川端画学校の留学生は、1918年度洋画科一年生の朱増鈞であり、合わせて6名しかいなかった。〈表1〉の江川佳秀名簿から分かるように、1915年入学した王霏が川端画学校の最初の留学生であり、1921年までに40名近くの中華民国の留学生が入学した。著名な画家である陳抱一（陳洪鈞）は二回川端画学校に入学していたが、監督處資料には記録がなかった。

関良を除いて〈表4〉の5名の留学生は全て〈表1-1〉に載っている。関良は1921年川端画学校に在籍していたが、『記名簿』には記録がなかった。それは関良が在籍した1921年からの3年間あまりの『記名簿』がまだ発見されていないからである。『関良回憶録』に次のように記録されている。「許敦谷に紹介され、私はまず川端研究所で勉強していたが、先生は当時日本でとても有名な画家藤島武二であった。しかし、住所は学校からすごく遠かったので、しばらくしてから、近くにある太平洋画会（「太平洋画会研究所」後に「太平洋美術学校」に改称）に転校した。先生は中村不折であった。」<sup>13</sup> 帰国後の関良は上海美術専門学校などで教鞭を取りながら画家活動をしていた。

#### 四. 「文化補給」留学生徐祖馥と「文化特選」留学生沈学誠

中国人留学生に学費を補給する制度は、1924年に始まった「対支文化事業」の一環である。学費補給留学生には三種類あり、それらは、中国教育部を中心に日中共同選考による「一般補給留学生」；日本側の単独選考による「選抜補給留学生」；大学院レベルを対象とする「特選留学生」である。この三種類は一般的に「文化補給」、「文化選抜」、「文化特選」と呼ばれている。

本稿の各表から見ると、川端画学校の補給留学生は、「文化特選」の沈学成しかいなかったが、外務省外交史料館の資料により、<表2>の徐祖馥も「文化補給」留学生であることが判明した。

川端画学校（大正14年度）川端画学校大正14年度学資補給支那留学生 徐祖馥  
東京女子美術西洋画科卒業 川端画学校研究 新疆省 大正14年5月18日<sup>14</sup>

この記録から分かるように、徐は1925年度新疆省卒の補給学生になった。同資料に徐の履歴書のような書類があり、「原籍地 中華民国江蘇省崑山県」と書いてあり、徐の原籍地は、江蘇省であった。ほかには「明治38年6月12日生、学歴 大正10年3月東京女子美術西洋画科卒業、職歴 北京孔徳学校教員」と記載されている。当時東京女子美術学校という名称の学校はなく、それは、女子美術学校の誤りと考えられる。裏付けになるのは、女子美術学校の学籍簿であり、徐祖馥は12歳時の1918年4月13日に入学し、上述の資料の記録とは違って、卒業ではなく、1918年12月25日に退学したと記してある。<sup>15</sup>

また次の資料から1926年度徐祖馥は学費支給を保留されたことがわかった。

大正十五年度 川端画学校大正十五年度学費支給支那留学生（前年度ヨリ継続ノ分）  
○徐祖馥 西洋画科研究生 但○印ハ選定上□□アルニ付一時学資ノ支給ヲ保留  
スルモノナリ 東京女子美術西洋画科卒業 川端画学校研究 新疆省<sup>16</sup>

太文字の部分は手書きで□□は判別不能文字である。同資料には、当時川端画学校校長川端虎三郎から岡部文化事業部長宛の、徐祖馥は1925年度「成績優良」という報告書もある。

<表3>によると、沈学成は「文化選抜」留学生（1929年度）であったが、外務省外務省外交史料館の資料により、沈学成は1929年末に退学したことが判明した。それは1930年2月29日付の坪上文化事業部長から中国留日学生監督宛の手紙である。

拝啓 陳者貴国浙江省出身一般補給留学生沈学誠ハ曩ニ退学届ヲ提出シタル由ニテ  
其ノ在学シタル川端画学校ヨリ同人ノ一月及二月分学費返納シ来リタルニ付同人ニ  
対シテハ昭和四年十二月限り補給資格ヲ取消スコトト相成候条右様御了知相成度此  
段申進候 敬具<sup>17</sup>

現在の資料から見ると川端画学校には補給留学生は二人しかいなかった。二人とも、それぞれの原因で学費補給が中断されていた。対照的に官立の東京美術学校に学費補給留学生が多かった。それについてのデータ分析は次回の課題にしたい。

## 終わりに

近代中国人日本留学史を研究するために、留学先の各学校記録は、不可欠の重要資料である。しかし、戦火で学校が全焼し、資料が殆ど残されていない学校は少なくない。さらに、川端画学校のように廃校になった学校もあり、留学生の資料探しは困難な作業といえる。本稿において川端画学校『記名簿』を基にした江川佳秀名簿（1913.9-1920.12;1924.6-1931.2）と日華学会名簿（1925;1927-1944）及び監督処資料（1914-1921）により、川端画学校中国人留学生の基本データはかなり明らかになった。1915年から1940年まで少なくとも150名近くの中国人留学生が川端画学校で学んだのである。そのうち、東京美術学校に進学した者も少なくなく、留学生にとっても川端画学校は東京美術学校に進学するための受験予備校という認識もあった。

『記名簿』を基にした江川佳秀名簿は、普通の統計と違い、年間を通じての入学申込者のリストである。画学校の留学生は短期間で退学した者が少なくなかったが、『記名簿』には申込時点での留学生が殆ど網羅されている。また日華学会名簿は毎年決まった月に調査が行われたため、短期間に学んだ留学生で調査月に在籍していない者は、名前が記載されない。この理由から日華学会名簿は江川佳秀名簿に比べ記録された留学生の人数は少ない。両名簿に同じ期間データがあるのは、1925年、1928-1930年の4年間しかない。同じ年度の人数の差が一番多いのは1929年で、日華学会名簿の8名に対して江川佳秀名簿には21名である。〈表1-1〉と〈表2〉及び〈表3〉を照合した結果により、在籍している留学生は、少数ではあるが、『記名簿』に記名していない者もあったことがわかった。

上述の三つの資料を基に作成した名簿には、人数などのズレがよく見られる。その原因として、資料の性質の違いから生じる情報のズレ、中国の自費留学生の「半無政府状態」の特徴、調査時期の違いなどが挙げられる。

日本へ留学した美術学生たちは、帰国後、画家として中国美術界の中堅になった者がよく見られる。

## 謝辞

資料収集にあたり、江川佳秀先生からは、自ら作成された川端画学校中国人留学生名簿を提供していただきました。また日本大学理工学部図書館に、いつものことながら関連資料を集めていただきました。ここに感謝の意を表します。

本研究は Jsps 科研費 17H02686 の助成を受けたものです。

1 鶴田武良「留日美術学生 一近百年來中国絵画史研究 五一」『美術研究』第367号、1997年3月、127-139頁。

- 2 吉田千鶴子の『近代東アジア美術留学生の研究—東京美術学校留学生史料—』（ゆまに書房，2009年。）は東京美術学校で勉強した留学生についてそれぞれ詳細に紹介した。筆者の『近代中国人女性日本留学史の研究』（国書刊行会，2000年）に女子美術学校（前身は私立女子美術学校，1929年女子美術専門学校に昇格。）の留学生名簿を載せている。
- 3 鶴田武良「留日美術学生 一近百年來中国絵画史研究 五一」『美術研究』第367号，1997年3月，128頁。
- 4 江川佳秀「川端画学校沿革」『近代画説』2004年，41-42頁。
- 5 「民国時期留日美術学生的名單汇集和史料分析 —1923, 1925, 1927 ~ 1944年—」（中国語）中国齊魯師範学院学報編集部『齊魯師範学院学報』第30卷第6期，2015年12月，6-18頁。
- 6 東京にあった清国の游日学生監督処，中華民國留日学生監督処が発行した『官報』，調査報告書，統計，名簿など（1921年まで）の文献である。早稲田図書館所蔵。
- 7 江川佳秀「中国人画学生たちが学んだ場所—特に川端画学校と太平洋画会研究所を中心に」，広東美術館研究会「浮游的现代性：20世紀前半叶広州，上海，東京の美術運動和都市文化」での口頭発表資料，2007年12月23日。
- 8 吉田千鶴子著『近代東アジア美術留学生の研究—東京美術学校留学生史料—』ゆまに書房，2009年，163頁。
- 9 財団法人日華学会学報部『昭和4年6月現在 留日中華学生名簿』1929年，63頁。
- 10 拙論「民国時期留日美術学生的名單匯集和史料分析 —1923, 1925, 1927 ~ 1944年—」（中国齊魯師範学院学報編集部『齊魯師範学院学報』第30卷第6期，2015年12月）を参照。
- 11 周一川『近代中国人女性日本留学史の研究』国書刊行会，2000年，192，195頁。
- 12 昭和12年度・康德4年度『満洲国留日学生録』駐日満洲国大使館，1937年，174頁。
- 13 『関良回憶録』関良自述・陸関発整理，上海書画出版社，1984年版，16頁。
- 14 JACAR（アジア歴史センター）Ref.B05015461600，「在本邦一般留学生補給実施関係雑件／諸学校関係」（外務省外交史料館）。
- 15 周一川『近代中国人女性日本留学史の研究』国書刊行会，2000年，192頁。
- 16 JACAR（アジア歴史センター）Ref.B05015461700，「在本邦一般留学生補給実施関係雑件／諸学校関係」（外務省外交史料館）。
- 17 JACAR（アジア歴史センター）Ref. B05015450500，「在本邦一般留学生補給実施関係雑件／諸学校関係」（外務省外交史料館）。



## 凡 例

1. この一覧表は日本大学理工学部及び短期大学部（船橋校舎）一般教育教室の教員の研究業績を発表形式別に採録したものである。
2. 論文等、口頭発表、著書について2016年4月1日より2017年3月31日までの業績を記してあり、その記載法は次のとおりである。
  - i) 論文等（A. 論文・研究ノート, B. 翻訳・翻刻・評論・解題, C. その他）
    - ① 著者名 ② 題名 ③ 掲載誌名 ④ 巻, 号, 頁 ⑤ 掲載年月（〔 〕内に示す）
  - ii) 口頭発表 ① 発表者名 ② 題名 ③ 発表学会名 ④ 発表年月（〔 〕内に示す）
  - iii) 著 書 ① 著者名 ② 書名 ③ 発行所名 ④ 発行年月（〔 〕内に示す）
3. おのおの発表形式においては、分野別研究者五十音順とし、連名の場合は主たる者に○印を付した。
4. 申し出のあったものだけに限り掲載した。

### < 論 文 等 >

#### A. 論文・研究ノート

ISHIBE Naoto	Le régime de territorialité linguistique et les langues non-officielles en Belgique	<i>La territorialitat lingüística, "Quaderns per l'anàlisi"</i> , Horsori Editorial, Vol.44, pp.81-91	[16. 6]
○ハインリッヒ・パトリック 石 部 尚 登	第三の波の社会言語学におけることばとアイデンティティ	『ことばと社会』三元社 第18号, pp.4-10	[16.10]
郭 海 燕	日本学術界有関朝鮮開化派金玉均的研究（査読有） （日本学界における朝鮮近代開化派金玉均の研究）	『韓国研究論叢』 復旦大学韓国研究中心 Vol.31, pp.128-151	[16. 7]
郭 海 燕	日本学術界与甲午戦争研究（査読無） （日本学界における日清戦争の研究）	『2016年中国朝鮮史研究会学術年会 論文集・近現代史』 中国朝鮮史研究会・延边大学, pp.61-69	[16. 8]
周 一 川	「民国時期留日美術学生中の女性 －1922～1944年－」（中国語）	中日教育研究協会『中日教育論壇』 第6期, pp.59-68	[16. 4]
○時 田 伊津子 中 川 浩 周 一 川 郭 海 燕 柳 武 司 石 部 尚 登 道 川 典 子	初修外国語教育における検定試験の 対策支援	日本大学理工学部一般教育教室彙報 第101号, pp.11-20	[16.10]
時 田 伊津子	比較を表す二重目的語構文	桜門ドイツ文学会「リユンコイス」 第50号, pp.185-200	[17. 3]
柳 武 司	受動の意味を持つ不定詞と結びつく sich lassen の統語構造と文体分析	桜門ドイツ文学会「リユンコイス」 第50号, pp.147-167	[17. 3]
○永 山 貴 洋 山 内 武 巳 北 村 勝 朗	優れたシーカヤック指導者のロール 動作遂行時における動作意識の質 的分析	石巻専修大学研究紀要 Vol.28, pp.71-78	[17. 3]

- |   |   |  |         |
|---|---|--|---------|
| 黒田友紀  | 21世紀型学力・コンピテンシーの開発と育成をめぐる問題   | 学校教育研究<br>第31号, pp.8-22  | [16. 8] |
| 黒田友紀  | 米国の人種統合計画におけるカラー・コンシヤスからカラー・プラインドへの変容   | アメリカ教育学会紀要<br>第27号, pp.15-27   | [16.10] |
| Takefumi Igarashi   | Blow-up and critical Fujita exponents in a degenerate parabolic equation  | Journal of Mathematics and System Science<br>Vol.6 (第7号), pp.276-283                             | [16. 7] |
| 梅田耕平  | A Laplace transform of Laplace hyperfunctions in several variables (多変数ラプラス超関数のラプラス変換)  | 数理解析研究所講究録別冊<br>B57, pp.85-92  | [16. 5] |
| Naoki Kubota  | Rank-one perturbation formulas for the planar simple random walk in random potentials   | RIMS Kôkyûroku Bessatsu "Stochastic Analysis on Large Scale Interacting Systems" B59, pp.237-252 | [16. 7] |
| Naoki Kubota  | Rate of convergence in first passage percolation under low moments  | Stochastic Processes and their Applications<br>Vol.126 (第10号), pp.3065-3076                      | [16.10] |
| ○ Kazuo Takemura<br>Atsushi Nagai<br>Yoshinori Kametaka   | Two types of discrete Sobolev inequalities on a weighted Toeplitz graph   | Linear Algebra and its Applications<br>Vol.507 (第2016号), pp.344-355                              | [16.10] |
| ○ So Kitsunozaki<br>Akio Nakahara<br>Yousuke Matsuo   | Shaking-induced stress anisotropy in the memory effect of paste   | Europhysics Letters<br>Vol.114 (第6号), 64002-p1-64002-p7  | [16. 7] |
| ○ Akio Nakahara<br>Yousuke Matsuo<br>Kyosuke Uchida<br>Hiroshi Izui<br>So Kitsunozaki<br>Ferenc Kun     | Memory effect of paste and its application to control morphology of desiccation crack pattern   | The Proceedings of the 20 <sup>th</sup> International Drying Symposium<br>A-6-3-p1 - A-6-3-p5    | [16. 8] |
| ○ Masato Nakamura<br>Atsushi Ichimura   | Evolution of the energy-loss-spectrum profile with the projectile mass in impulsive ion-molecule collisions   | Physical Review A<br>Vol.96, 022717 pp.1-7   | [16. 8] |
| Tadashi Aoyama<br>Ken-ichi Itoh<br>Yuri Furukawa<br>Mamiko Hayakawa<br>Shigeru Shimada<br>Akihiko Ouchi | A Facile Synthesis of <i>N</i> -Alkoxyacylimidoyl Halides from $\alpha$ -Nitro Ketones and Alkyl Halides in the Presence of $\text{NaHSO}_4/\text{SiO}_2$ | Synlett<br>Vol.28, pp.489-493  | [16.11] |
| ○ 露木尚光<br>小泉公志郎   | 非焼成による廃セッコウの硬化に及ぼすケイ酸水溶液添加の影響   | Journal of the Society of Inorganic Materials, Japan<br>Vol.23, pp.136-141                       | [16. 5] |
| ○ 佐藤正己<br>小泉公志郎<br>梅村靖弘   | フライアッシュと水酸化カルシウムによるポゾラン反応に及ぼす養生温度の影響  | セメント・コンクリート論文集<br>Vol.70 (第1号), pp.69-76   | [17. 3] |

T. Yoneda	Reductive Degradation of Chlorophenol in Water-based Solvent Using Heterogeneous Catalyst Grafted By a Hydrophobic Reagent	Organohalogen Compounds Vol.78, pp.1050-1052	[17. 2]
-----------	--	---	---------

## C. その他

勢 力 尚 雅	山田顕義の「人間の条件」	女性と文化 下田歌子研究所年報 Vol.3, pp.26-36	[17. 3]
石 部 尚 登	ベルギーのドイツ語	<i>Brunnen</i> Vol.500, pp.18-21	[16. 7]
石 部 尚 登	ベルギーの言語問題の歴史と「今」	『人生は狂詩曲』ファインフィルムズ pp.15-16	[16. 7]
周 一 川	「書評と紹介」浜口裕子著『満洲国留日学生の日中関係史 満洲事変・日中戦争から戦後民間外交へ』	日本歴史編集部『日本歴史』 2016年10月号, pp.109-111	[16.10]
村 上 雅 彦	原子分光分析法の原理と発展 一炎色反応から誘導結合プラズマ発光分析法まで一	化学と教育 Vol.65 (第3号), pp.136-141	[17. 3]

## &lt;口頭発表&gt;

勢 力 尚 雅	対話・学習する組織と制度変化ー「規制」にどう向きあうべきか	日本機械学会 講習会「環境規制の実質化と次世代パワートレイン技術」	[17. 1]
石 部 尚 登	日白修好通商航海条約に関する歴史社会言語学的考察	日白修好 150 周年記念シンポジウム ー文化・知の多層性と越境性へのまなざし	[16.12]
郭 海 燕	「日本学术界与日清戦争研究ー从 2016 年的学术研討会上想起的ー」(日本学界における日清戦争の研究動向ー2016 年のシンポジウムを中心に)	「2016 年中国朝鮮史研究会学术年会」, 中国・延边大学	[16. 8]
郭 海 燕	巨文島事件与“甲申政変”後的英国極東政策 (巨文島事件と甲申政変後におけるイギリス極東政策)	「現代性与地域性ー第十届現代中国變動与東亜格局国際學術シンポジウム」, 中国・山東大学, 南開大学, 日本・大阪大学, 台湾・東華大学 共同開催	[16. 8]
郭 海 燕	李鴻章与朝鮮半島の電信線建設 (李鴻章と朝鮮半島の電信線建設)	「国際視野下の李鴻章研究シンポジウム」中国・合肥	[16.11]
北 村 勝 朗	エキスパートの動機づけー音楽, 芸術, 科学領域の熟達体験を対象とした質的分析ー	第 14 回スポーツ動機づけ研究会	[16. 6]

北村勝朗	エキスパート・ボート競技者指導者の実践知に焦点を当てたコーチング・メンタルモデルの質的分析	日本体育学会 第 67 回大会	[16. 8]
北村勝朗 手塚洋介 関木直人 高井秀明	感情から紐解く体育・スポーツ科学のこれから	日本体育学会 第 67 回大会 専門領域企画シンポジウム	[16. 8]
○伊藤詩織 佐々木万丈 北村勝朗	布ナプキンの使用による月経症状に対する意識の変容：女子大学生スポーツ競技者を対象として	日本体育学会 第 67 回大会	[16. 8]
○北村勝朗 尹得霞 中島徹	中国語学習におけるデジタルペン（エコー・スマートペン）の活用に関する質的研究	日本教育工学会 第 32 回全国大会	[16. 9]
○北村勝朗 西田保	運動部活動の中で社会的一体感をどのように体験するのか：高等学校女子バスケットボール選手を対象とした質的分析	日本教育心理学会 第 58 回総会	[16.10]
○齊藤茂 北村勝朗 内田若希	審判員の判定（レフェリング）に関する心理学的考察Ⅰ：大学生サッカー選手を対象とした審判員の判定に関する印象調査	日本スポーツ心理学会 第 43 回大会	[16.11]
○尹得霞 北村勝朗	中国人教師の熟達化過程から捉える大学初年次第二言語教育における中国語授業観の質的分析	日本教師学学会 第 18 回大会	[17. 3]
○難波秀行 黒坂裕香 田中由佳里 村木美紀 湊久美子	女子大学生のライフスタイルと身体活動量・体力・身体組成の関係	平成 28 年度 第一回千葉県体育学会	[16. 5]
○長谷川由美 黒坂裕香 難波秀行 王堂哲 櫻井洋一	運動負荷前後における長期的カルニチン単独、カルニチン+BCAA 投与後のエネルギー基質代謝に関する検討	第 39 回日本栄養アセスメント研究会	[16. 5]
○Hideyuki Namba Yuka Kurosaka Yukari Tanaka Yuko Shionoya Kumiko Minato	RELATIONSHIP BETWEEN ESTIMATED MAXIMUM OXYGEN INTAKE, PAST SPORTS EXPERIENCE AND PHYSICAL ACTIVITY IN FEMALE UNIVERSITY STUDENTS	21 <sup>st</sup> EUROPEAN COLLEGE OF SPORT SCIENCE	[16. 7]
○湊久美子 田中由佳里 村木美紀 高梨萌三 小難秀行 松本行恵	大学陸上競技選手の食生活状況と栄養教育介入による改善効果	第 167 回日本体力医学会関東地方会	[16. 7]
○長谷川由美 難波秀行 櫻井洋一 王堂哲	健常者におけるカルニチン+BCAA 投与後の運動負荷の体組成、骨格筋保護に対する効果	第 53 回日本外科代謝栄養学会	[16. 7]

- |   |   |  |         |
|---|---|--|---------|
| ○長谷川 由 美<br>難 波 秀 行<br>黒 坂 裕 香<br>櫻 井 洋 一<br>王 堂 哲                                  | 健常者におけるカルニチン+BCAA<br>A 投与後の運動負荷のエネルギー<br>代謝, 体組成, 骨格筋保護に対す<br>る効果   | 第 37 回日本臨床栄養協会総会   | [16.10] |
| ○Hideyuki Namba<br>Yukari Tanaka<br>Minori Muraki<br>Yosuke Yamada<br>Misaka Kimura | Effects of wristwatch-type wearable<br>device in promoting physical activity:<br>A randomized controlled trial  | The International Congress on Physical<br>Activity and Public Health 6 <sup>th</sup>             | [16.10] |
| ○長谷川 由 美<br>難 波 秀 行<br>櫻 井 洋 一<br>王 堂 哲   | 運動負荷前後における長期的カルニ<br>チン単独, カルニチン+BCAA<br>投与後の蛋白質代謝, 骨格筋保護<br>に関する検討  | 第 32 回日本静脈経腸栄養学会   | [17. 2] |
| ○難 波 秀 行<br>小 林 勝 法   | 大学生のスポーツ経験と意識に関する<br>調査報告ー全国 16 大学・短期大学<br>にて実施した大規模調査ー   | 第 5 回大学体育研究フォーラム   | [17. 3] |
| 黒 田 友 紀   | 米国における「PISA の影響」ー教育<br>企業と教育内容・評価をめぐる問<br>題ー  | 日本カリキュラム学会第 27 回大会   | [16. 7] |
| 黒 田 友 紀   | 米国オバマ政権の学校改善改革の検<br>討ーマサチューセッツ州における<br>イノベーション・スクールを事例<br>として   | 日本教育学会第 75 回大会   | [16. 8] |
| 黒 田 友 紀   | Corporate education reform の展開:<br>Common Core State Standards を<br>めぐるゲイツ財団とピアソン社の<br>教育への関与を中心に   | アメリカ教育史研究会   | [17. 1] |
| 梅 田 耕 平   | A vanishing theorem of global cohomology<br>groups with values in the sheaf of<br>Whitney jets with Gevrey conditions<br>(ジュブレイ族のホイットニージェッ<br>トを層係数とする大域コホモロジー<br>群の消滅定理) | 研究集会「New development of microlocal<br>analysis and singular perturbation<br>theory」, 京都大学数理解析研究所 | [16.10] |
| 梅 田 耕 平   | ジュブレイ族のホイットニージェッ<br>トを層係数とする解析的多面体上<br>の大域コホモロジー群の消滅定理  | 研究集会「代数解析奈良研究集会」,<br>奈良女子大学  | [16.11] |
| 梅 田 耕 平   | 多変数 Laplace 超関数の理論について  | 研究集会「微分方程式の総合的研究」,<br>京都大学大学院理学研究科   | [16.12] |
| 梅 田 耕 平   | A vanishing theorem of global cohomology<br>groups with values in the sheaf of<br>Whitney jets with Gevrey conditions<br>(ジュブレイ族のホイットニー<br>ジェットを層係数とする大域コホモ<br>ロジー群の消滅定理) | 研究集会「Harmonic Analysis Forum」,<br>東京都市大学   | [17. 2] |
| Naoki Kubota  | Concentration inequalities for the<br>simple random walk in unbounded<br>nonnegative potentials   | Workshop on percolation, spin glasses<br>and random media  | [16. 5] |

- |   |   |  |         |
|---|---|--|---------|
| 久保田 直 樹   | 不規則媒質中の乱歩に対する大偏差原理とリアプノフ指数  | 日本数学会 2016 年度秋季総合分科会 (統計数学分科会特別講演)   | [16. 9] |
| 久保田 直 樹   | フロッグモデルにおける情報伝達速度の末尾評価  | 第 60 回日本大学理工学部学術講演会  | [16.12] |
| 久保田 直 樹   | Upper tail estimates for the first passage time in the frog model   | 無限粒子系, 確率場の諸問題 XII   | [17. 1] |
| 渡 邊 健 太   | ピカール数 1 の K3 曲面上の曲線に対する階数 2 の Mercat 予想について   | 第 4 回 K3 曲面・エンリケス曲面ワークショップ   | [16.10] |
| 渡 邊 健 太   | K3 曲面上のある種の分解しない Lazarsfeld-Mukai 束の例   | 日本数学会 2017 年度年会  | [17. 3] |
| ○ S. Okada<br>Y. Kamihara<br>N. Ohkubo<br>S. Ban<br>M. Matoba                                       | Substitution Effect of Fe on Transport Properties of the Layered Oxypnictide $\text{Sr}_2\text{ScCoPO}_3$ with CoP and $\text{Sr}_2\text{ScO}_3$ Layers | International Conference on Rare Earths in Sapporo, Japan (Rare Earths 2016 in Sapporo)  | [16. 6] |
| ○ 岡 田 悟 志<br>神 原 陽 一<br>大久保 尚 紀<br>伴 周 一<br>的 場 正 憲<br>鈴木 徳 一                                       | 層状遷移金属オキシニクタイト $\text{Sr}_2\text{ScCo}_{1-x}\text{Fe}_x\text{PO}_3$ の輸送特性   | 第 64 回応用物理学会春季学術講演会  | [17. 3] |
| Akio Nakahara   | Erasure of memory in paste by irradiation of ultrasonic waves   | ITISE 2016 (International work-conference on Time Series), Granada, Spain  | [16. 6] |
| Akio Nakahara   | Erasure of memory in paste by irradiation of ultrasonic waves   | 7 <sup>th</sup> Hungary-Japan Bilateral Workshop on "Statistical Physics of Breakdown Phenomena", Atomki, Debrecen, Hungary                  | [16. 5] |
| ○ Akio Nakahara<br>Yousuke Matsuo<br>Kyosuke Uchida<br>Hiroshi Izui<br>So Kitsunozaki<br>Ferenc Kun | Memory of paste: Visualization as crack pattern and non-destructive structural analysis   | 31 <sup>st</sup> IUGG Conference on "Mathematical Geophysics", Paris, France   | [16. 6] |
| ○ Akio Nakahara<br>Ryota Yoneyama<br>Maruto Ito<br>Ryoma Ishikawa<br>Yousuke Matsuo                 | Experiments to control crack formation by imprinting, rewriting and erasing memories in paste   | Hungary-Japan Workshop on "Physics of Rheology and Fracture", Kyushu University, Fukuoka   | [16.12] |
| Akio Nakahara   | Control of crack patterns using the memory in paste of magnetic field (招待講演)  | YITP Workshop on "Non-Gaussian fluctuation and rheology of jammed matter", Yukawa Institute for Theoretical Physics, Kyoto University, Kyoto | [17. 3] |
| Masato Nakamura   | "Stability and fragmentation of multiply charged clusters" (invited talk)   | International Conference "Dynamics of Systems on the Nanoscale" (DySoN2016)  | [16.10] |

- 石見勝洋 自作偏光膜を用いた液晶デバイス作  
平野壯哉 製授業の実践 日本理科教育学会 第66回全国大会 [16. 8]  
豊田陽周 己  
伴久保尚 一 紀  
村上大 尚 一 紀  
村上雅 彦 彦
- 石見勝洋 顕微鏡用薄片作製法の工夫と携帯端  
佐藤貴雅 末を使った簡易顕微鏡による観察 日本理科教育学会 東北支部第55回 [16.11]  
村上五弘 彦 之 研究大会
- 石見勝洋 偏光膜の作製とLCD デバイスの組  
平野壯哉 立の教材化 第60回日本大学理工学部学術講演会 [16.12]  
豊田陽周 己  
伴久保尚 一 紀  
村上大 尚 一 紀  
村上雅 彦 彦
- 伊藤賢一 生体触媒反应用小型LEDフォトバ  
村上山村 彦 忠 薫 イオリアクターの開発 第6回超異分野会議 [17. 3]
- 半沢拓也 NaHSO<sub>4</sub>存在下での2-イソオキサソ  
森本尚規 リン誘導体の簡便な合成法の開発 日本化学会第97春季年会 [17. 3]  
目黒夏美  
村松瑞樹  
早川麻美子  
青山藤賢 忠  
伊大内秋比古 一
- 伊藤賢一 赤色パルス照射下におけるシアノ  
村上山村 彦 忠 薫 バクテリアによるケトンの不斉還元 日本藻類学会第41回大会 [17. 3]
- 大宅淳一 セレン酸イオンを取り込んだCaO-  
平野壯哉 Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>系水和物の性質 第43回セメント・コンクリート研究 [16.10]  
村上五弘 彦 之 討論会
- 佐藤正己 養生温度がフライアッシュのポゾラ  
小泉公志郎 ン反応におよぼす影響 セメント協会 [16. 5]  
梅村靖弘 弘 第70回セメント技術大会
- Masaki Okada Global monitoring of chemical contam- 252<sup>nd</sup> American Chemical Society (ACS) [16. 8]  
Koshiro Koizumi ination derived from plastics sur- National Meeting  
Takashi Kusui rounding Japan  
Hidemitsu Katsura  
Kazunori Saitoh  
Daisuke Takahashi  
David Karl  
Nikolai Maximenko
- Katsuhiko Saido  
Toshihiko Hiaki

- Keiji Amamiya Global monitoring of styrene oligomer 252<sup>nd</sup> American Chemical Society (ACS) [16. 8]  
Koshiro Koizumi contamination surrounding Japan National Meeting  
Kohei Takatama  
Nikolai Maximenko  
Bum Gun Kwon  
Seon-Yong Chung  
Kazunori Yamada  
Takeshi Takemura
- Katsuhiko Saido  
Toshihiko Hiaki
- 神越俊基 フライアッシュのポゾラン反応に及 土木学会 平成 28 年度全国大会 [16. 9]  
梅村靖弘 ぼす養生温度履歴の影響  
佐藤正己  
小泉公志郎
- 小泉公志郎 トリメチルシリル誘導体化法からみ 第 43 回セメント・コンクリート研究 [16.10]  
佐藤正己 た水硬性材料のケイ酸構造 討論会  
梅村靖弘  
露木尚光
- 佐藤正己 シリカフェームを添加した超高強度 第 43 回セメント・コンクリート研究 [16.10]  
小泉公志郎 セメント硬化体の水和反応 討論会  
梅村靖弘
- 荒川理加 高炉セメントを用いたプレキャスト 第 60 回日本大学理工学部学術講演会 [16.12]  
佐藤正己 コンクリートの水和反応へ及ぼす  
小泉公志郎 熱養生履歴の影響  
梅村靖弘
- 雨宮恵司 日本沿岸に漂着するポリスチレンから 環境ホルモン学会 第 19 回研究発表 [16.12]  
小泉公志郎 発生するスチレンオリゴマー汚  
高玉孝平 染実態  
岡田昌樹  
権凡根  
鄭宣龍  
道祖土勝彦  
日秋俊彦
- 岡田昌樹 プラスチック由来の化学物質による 環境ホルモン学会 第 19 回研究発表 [16.12]  
小泉公志郎 日本沿岸の海洋汚染 会  
佐藤秀人  
山田和典  
D.M.Karl  
道祖土勝彦  
日秋俊彦
- Kouhei Hano Removal mechanism of arsenic by THE 4<sup>th</sup> INTERNATIONAL CONFERENCE [16.10]  
Takeshi Toyama hydration of calcium aluminoferrite ON COMPETITIVE MATERIALS AND  
Masaya Hirano TECHNOLOGY PROCESSES  
Nobuyuki Nishimiya  
Hiroyuki Sango
- T. Yoneda Reductive Degradation of Chlorophenol The 36<sup>th</sup> International Symposium on [16. 8]  
in Water-based Solvent Using Halogenated Persistent Organic  
Heterogeneous Catalyst Grafted By a Pollutants (POPs)–DIOXIN 2016  
Hydrophobic Reagent



## &lt;著 書&gt;

- 花袋研究会編 田山花袋『近代の小説』注釈書Ⅱ 花袋研究会 [17. 3]  
 (注釈書Ⅱの執筆 分担執筆：三十四章から三十六章  
 者  
 市川浩昭・宇田川  
 昭子・神田重幸・  
 岸規子・小堀洋平・  
 高野純子・細田明  
 彦・丸山幸子)
- 西 田 保 『児童心理』 3月号 金子書房 [17. 3]  
 佐々木 万 丈 分担執筆：スポーツ心理学からみ  
 北 村 勝 朗 た負けず嫌い
- 難 波 秀 行 大学生のスポーツ経験と意識に関する 公益社団法人全国大学体育連合(大 [17. 3]  
 小林 勝 法 る調査報告書 学体育関連情報調査チーム)  
 分担執筆：pp.2-37
- 難 波 秀 行 PGA カレッジゴルフテキスト 大学 公益社団法人日本プロゴルフ協会 [17. 3]  
 他 20名編集 ゴルフ授業教則本
- 難 波 秀 行 大学ゴルフ授業ワークブック ゴルフダイジェスト社 [17. 3]  
 他 19名著
- 日本学校教育学会 『これからの学校教育を担う教師を目標 学事出版株式会社 [16. 9]  
 編著 指すー思考力・実践力アップのため  
 黒 田 友 紀 の基本的な考え方とキーワード』  
 他 分担執筆：第Ⅲ部 教育の今を知る  
 50のキーワード  
 KEYWORD20 21世紀型能力と学  
 びの共同体 (pp.144-145)
- 浅 井 幸 子 『教師の声を聴くー教師のジェンダー 学文社 [16.10]  
 黒 田 友 紀 研究からフェミニズム教育学へ』  
 山 二 季  
 玉 城 久美子  
 柴 田 万里子  
 望 月 一 枝
- 山 田 雅 彦 『教育課程論』 学文社 [16.10]  
 編著  
 黒 田 友 紀  
 他 4名著

### 編集規定

1. 本誌は、日本大学理工学部一般教育教室の機関誌であり、その目的を本学部と短期大学部（船橋校舎）に所属する教員の学術研究発表とする。
2. 本誌の発行は、年度内2回とする。
3. 本誌には、論文、研究ノート、依頼論文および研究動向の各欄を設ける。
4. 論文・研究ノートは査読制とする。
5. 掲載は編集委員会の決定による。
6. 彙報に掲載された論文・研究ノートは、本教室のウェブサイト上において公開する。

### 投稿規定

1. 投稿者は、原則として本学部と短期大学部（船橋校舎）に所属する教員とする。ただし、編集委員会が特別に許可した者は投稿を認めることができる。
2. 投稿する論文等はいずれも他に未発表のものに限る。ただし、口頭発表およびその配布資料はこの限りではない。
3. 投稿は1人1編とする。
4. 掲載決定後の加筆、訂正は原則として認めない。
5. 投稿者は、編集委員会に ①投稿原稿（英文の題目・氏名を付けたもの）、②審査用原稿コピー2部、③邦文要旨（600字以内）、④投稿者連絡票 を提出する。  
注. 原則として電子ファイルで提出すること。
6. 原稿は下記の執筆要領に従うこと。

### 執筆要領

1. 原稿は、A4用紙を用い、原則として横書きとする。
2. 本文・図・表・注・引用文献を含めて、下記のレイアウトで10ページ以内とする。
3. 和文 一段組 1ページ 1行40字×36行、1文字10.5ポイントとする。  
二段組 1行19字×36行×2段、1文字10.5ポイントとする。
4. 欧文 本文が 横15センチ×縦20センチ、1行16ポイント、1文字10.5ポイントとする。
5. 図・表は、論文原稿末尾に貼り付け、本文中に挿入箇所を指定する。
6. 注および引用文献の表示は下記の通りとする。
  - (1) 引用文献は通し番号をつけ本文の後にまとめて記載する。  
本文中の参照個所に文献の番号を記載する。
  - (2) 各文献は、「著者名・編著者名」「引用論文図書名」「出版社・発行地」「発行年」「ページ」を記載する。
  - (3) 欧文の場合、著者名は立体、書名は斜体にすること。
7. 表題等の文字の大きさは例文を参照すること。

### 編集委員（五十音順）

委員長	三島 隆 (Takashi MISHIMA)	
委員・幹事	石井直紀 (Naonori ISHII)	
委員	北村勝朗 (Katsuro KITAMURA)	三五弘之 (Hiroyuki SANGO)
	周 一川 (Yichuan ZHOU)	勢力尚雅 (Nobumasa SEIRIKI)
	谷岡 朗 (Akira TANIOKA)	中原明生 (Akio NAKAHARA)

### 一般教育教室彙報 第103号

発行日 平成29年10月30日  
 発行者 日本大学理工学部 一般教育教室  
 三 島 隆  
 印刷者 日本フィニッシュ株式会社  
 高 橋 嘉 久

BULLETIN  
OF  
DEPARTMENT OF GENERAL EDUCATION  
COLLEGE OF SCIENCE AND TECHNOLOGY  
NIHON UNIVERSITY  
No. 103

---

CONTENTS

**Articles**

- Basic Survey to Create an Ideal Circulation of Playing, Viewing and Supporting  
for Sports Promotion .....Hideyuki NAMBA, Akira JUJO,  
Ryosuke TAKAHASHI, Hanae HATTORI, Ayako AZUMI, Kazuma OKI ..... 1

**Monograph**

- On Chinese Students at the Kawabata Painting School  
..... Yichuan ZHOU ..... 11

- A List of Recent Studies ..... 25